

京都美術の歴史学—京都芸大の1950年代—

2018年度活動報告

本プロジェクトは、戦後の占領期・復興期の京都における本学教員の教育改革について、美術史・社会史の横断的な観点から再検証することを大きな目標としている。復興期の染色デザイン史を専門とする牧田久美を共同研究者に迎え、彫刻専攻については菊川が、デザイン専攻については牧田が各自調査を進めた。

彫刻専攻で始められた抽象形態を学ぶカリキュラムの実態を知るため、実施初年度の1953年に入学した宮永理吉氏に聞き取り調査を行い、教員・学生ともに手探りのなか授業が進められた状況を知ることができた。

一方、改革の中心となった堀内正和の当時の手記には、最新の欧米美術の情報を求め京都の文化施設を訪ね歩いたとある。そのなかには占領軍が運営するCIE図書館もあるが、親仏派のこの作家はとりわけ関西日仏学館と縁があり、講義への資料提供など援助を受けていたようだ。1927年に開館した学館は、東京の日仏会館とともに大戦前後における両国の美術家や美術史家たちが交差する場であったが、まとまった先行研究がない。今回、アンスティチュ・フランセ関西と京都大学人文科学研究所「みやこの学術資源研究・活用プロジェクト 京都における日欧交流史の初期調査」の協力のもと、本学教員との関わりを整理した。

当初、学館にはポール・クロードと縁のある竹内栖鳳などの日本画家が訪れ、その後は初代宮永東山などの美術商や黒田重太郎など渡仏経験のある洋画家が集った。また芸術に造詣の深いフランス人教授のなかには堀内正和や堂本尚郎らと個人的に親交を深めた人物もいたことから、教育改革の背景にもこのような交流があったことがわかった。研究成果の一部は、今年度刊行の本学美術学部紀要に論文「関西日仏学館と京都の美術家—第二次世界大戦期の交流について」としてまとめた。以後、引き続き多角的な調査を続けていく。

デザイン専攻の教授であった上野リチに対する本学関係者の思いは殊の外深く、その教育理念は想像以上に現在まで受け継がれている。この一年は彼女についての情報をできるだけ蒐集するという計画で挑んだ。リチ自身はあまり語る人ではなく、また彼女を対象とする研究もその功績に比較すると非常に少ない。そのため戦前の動向については、公私ともに彼女と行動を共にした建築家上野伊三郎の著書や建築関係の諸雑誌記事から浮き彫りにする方法をとった。帰国後の伊三郎は建築界のリーダー的存在として発言の機会も多く、また彼の目指す総合的な新しい建築にはリチの参加も不可欠で、これらからウィーン工房の基本理念が京都やその他、地方に移植される具体的な様子を解明することができた。

また、戦後に関しては、直接彼らの指導を受けた方々への聞き取り調査や残存資料、またリチが退官直後の1963年、伊三郎とともに設立したインターナショナルデザイン研究所の教育の実践記録や関連雑誌から、教育者としてのリチの歩みを追った。彼女から多くの影響を受けた中井貞次・中村隆一名誉教授や画家の向井吾一氏などへの聞き取り調査で、彼女の教育の理念や姿勢を確認できたほか、それらの実践が今も受け継がれている事実を滝口洋子教授から伺った。さらに調査の過程で日生劇場の天井画・壁画制作に関する貴重なエピソードを知ることができ、ウィーン工房のエッセンスである上野リチの日本での制作と教育の解明が、本学においてなされるべき必然性と重要性をさらに確信することとなった。

以上、菊川と牧田の両名は調査の過程で一次資料の収集も進めており、来年度は意見交換や資料公開の機会を持つべく準備を進めている。

菊川 亜騎（美術学部非常勤講師・芸術資源研究センター客員研究員）